大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第二十三卷　第五號

大正十五年十一月一日發行


## 論叢

消費稅の理想としての專賣　教授　法學博士　神戸正雄

價格の一理論　教授　九州帝國大學文學博士　高田保馬

伊豫の百姓一揆　教授　經濟學士　黑正巖

## 時論

再び我國の人口問題に就て　教授　法學博士　山本美越乃

## 說苑

アダム・スミスの勞賃論　講師　經濟學士　森耕二郎

妙心寺の寺領と領民の負擔　經濟學士　中川與之助

## 雜錄

近世の恐慌と其一般的普及性　高松高等商業學校教授　經濟學士　小川福太郎

信州小布施の地割制度　教授　經濟學博士　本庄榮治郎

Vital Statistics に就きて　教授　法學博士　財部靜治

英吉利海運の統計的研究　教授　經濟學博士　小島昌太郎

勞農露國の豫算　經濟學士　吉川秀造

シェムペーターのシュモッラー觀　經濟學士　菊田太郎

## 法令

郵便年金令・郵便年金特別會計規則・郵便年金規則・簡易保險規則中改正


（禁轉載）

説苑

# アダム・スミスの勞賃論

森耕二郎

## 一

アダム・スミスの勞賃論には、或る學者の云ふが如く、凡ゆる近代社會の勞賃論――生存費説、需要供給説（勞賃基金説）および勞働生産力説――の萠芽が存在するとも云はるゝ程に、その内容は一見錯雜、紛淆を極めてゐる。けれどもスミスの勞賃論を、全體的に、その内容に立ち入りて、解剖玩味するに於ては、たとひ彼は勞賃現象を一の對立的統一體の半面として、有機的によく連關、説明するに至らなかつた憾があるにしても、複雜なる勞賃現象をかなりによく包括的全面的に説明し、隨つて資本家的勞賃の本質、その發生を或る程度に見極め得たことを否定し得ない。スミスの勞賃論を吟味するに當り、吾々はこの點に就てスミスを非難する世上の諸々の批評に豫め戒心するの必要がある。

スミスは社會を原始社會と文明社會とに分別し、その各々に妥當する商品價値法則を論じたの

であつて（卽ち經濟現象を發展的歷史的に見たのであつて）、それは洵にスミスの一功績と稱へらるゝのであるが、彼は勞働の價格、勞賃を論ずるに當りても亦等しくこの態度を把持し、その原始社會に於ける勞働の報酬に就ての論議と文明社會――卽ち資本蓄積せられ、土地占有せらるゝに至りたる資本家的社會に於ける勞賃論とを區別する。吾々はスミスの勞賃論を檢討するに當りて、先づこの點についての彼れの用意を留意せねばならぬ。私は左に初めにスミスが所謂原始社會――單なる商品社會に於ける勞働の報酬に就いての彼れの見解を見るであらう。

## 二

スミスは『國富論』第一篇第八章の劈頭に於て論じて云ふ――

『勞働の生產物は勞働の自然的報酬卽ち自然的勞賃を成す。

『土地の占有および資本の蓄積に先だつかの事物の原始的狀態の下に於ては、勞働の全生產物は勞働者に歸屬する。勞働者はそれを分け合はねばならぬ地主も雇主も有たぬ』[1]。

スミスに依れば、若しもこの狀態が持續したならば、勞賃は分業が齎らす勞働生產力の凡ゆる發達に伴れて增加したことであらう。さうして凡ての物は漸次より廉價となつて來たであらう。卽ちそれらは從前よりはより少い勞働分量を以て生產されたことであらう。そして又等しい勞働分量を以て生產されたる財貨は、この事態の下に於ては、當然に相互に交換されるであらうから、それらは又より少い勞働量を以て購はれるであらう。尤も多くの財貨は以前よりもより多くの他の財貨の分量と交換されるから、外見上高價になつたやうに思はれることもあるが。

1) Smith, Wealth of Nations, Cannan's ed. I, p. 66.

併し乍ら、スミスに從へば、右述べたるが如き勞働者が勞働生產力の發達に伴ひ益々增加するところの勞働生產物を全部獲得するが如き事實の原始的狀態は、土地が占有せられ、資本が蓄積せらるゝに至つては、最早や持續するを得ず、この狀態は勞働生產力が著しく發達する以前に既に久しくその痕を絕つてしまつたのである。それゆゑにかゝる原始社會に於て勞働生產力の增大が如何に勞賃に影響を及ぼすところがあつたかを研究するのは徒勞である、とスミスは云ふのである。

卽ちスミスに在りては、原始社會に於ては、勞働者はその生產するところのものを他と分け合はねばならぬ必要なく、悉皆獲得することができるのであつて、勞働の報酬は勞働生產力の增大に伴ひ增加するのであるから、この場合に於けるスミスの勞賃論は純粹に勞働生產力說である。だが彼は、この說をたゞ單り原始社會にのみ作用するものとなし、異常なる勞働生產力を齎らすところの資本家的社會――そこでは勞働が賃勞働に變り、勞働條件が一方には土地財產として、他方には資本として勞働に對立する――の出現と共に、勞働者はその增大せる勞働生產力の果實を享受することができない、そこには他の勞賃法則が支配する、と見るのであつて、このスミスの態度は當に正しいと云はねばならぬ。後世資本家的社會の發達に伴ひ現はれ來り、一部の學者の間に支持を得たるところのかの勞働生產力說――それは依れば、勞賃は勞働者の勞働生產力の大小如何により決定される――の萠芽は既に早くこゝに見ることを得るのである。けれども――その二者の內容の差異は姑く別問題として――一部の學者がこの勞働生產力說を現今の資本家的

社會に於て支持主張するを見るにつけて、吾々はスミスのこの點についての用意、細心を尊重せずにはゐられない。

さて然らば土地の私有、資本の蓄積は何故にかゝる原始事物の狀態を排除したのであるか？スミスは引續きこの點について左の如く言つてゐる。

『土地が私有財產となるや否や、地主は勞働者が土地から收穫し、又は蒐集するところの殆んど凡ての生產物から分け前を要求するに至る。この彼れの地代は、土地の上に費されたるところの勞働の生產物からの第一の控除を成す。

『土地を耕作するその者が收穫を收める迄自己の生活を維持する所要手段を有つてゐることは殆んどない。彼れの生活資料はその主人――卽ち彼れを雇傭し、そして彼れの勞働生產物の分配に與るにあらざれば、換言すれば自分の資本が利潤と共に手許に戻つて來るにあらざれば、彼を雇傭するに何等の興味も有たない農業者――の資本から前拂されるのが普通である。この利潤は土地の上に使用される勞働の生產物からの第二の控除を成す。

『殆んど凡ての他の勞働の生產物も、これと同じやうな利潤の控除を免れない。凡ゆる手工業および製造業に於ては、大多數の勞働者は彼等の仕事の原料およびそが完成される迄の彼等の勞賃、生產資料を前貸する雇主を必要とする。雇主は彼等の勞働の生產物、卽ちその勞働が原料――その上に勞働が投ぜられる――に附加する價値、の分け分に與かる。この分け前が卽ち雇主の利潤を成すのである[1]』。

1) Smith, ibid., p. 67.

右のスミスの詞――それはスミスが文明社會に於ても依然として勞働價値說を支持したか、又は剩餘價値說を暗示したか否かの問題に關聯して屢々論議される有名なる文句――が示すやうに、彼に在りては、事物の發展に伴ひて、卽ち原始社會から資本家的社會へ變遷轉移するに應じて、勞働の報酬の本質は根本的に變動を受げるとせらるゝのであつて、彼はこゝにてよく一般的に現代資本家的社會に於ける勞賃の發生、本質、隨つてその歷史性を認識してゐる。卽ち彼はこゝにて近代資本家的生產關係の本質をその歷史性に於て認識することにより、資本家的勞賃制度の本質の所在をよく見極めてゐるのである。詳しく言へば、原始社會の崩壞の後をうけて、近代資本家的社會が發生するや、そこには一方に勞働手段の對象的手段、卽ち生產手段を獨占私有するところの地主、資本家が存在すると共に、他方に勞働力のほか何物をも所有しないがために、止むを得ずそれを賣却することにより漸くその日の生活を糊するところの近代自由勞働者が存在し、兩者は利害相對立する關係にあるがゆゑに、今迄自己の全勞働生產物より成り立つてゐたところの勞賃は、今やたゞその一部分より成るにすぎない、ことをスミスは理解してゐる。一言にして云へば、勞働力と生產手段との分離は必然的に勞働の報酬の本質に變動を齎らさゞるを得ないことを彼はよく認識し得たのである。この社會的生產方法、社會制度――隨つて又勞賃の歷史的經過的性質の認識はスミスの最も著しい功績の一に數へらるべきである。

然らばかくして發生したるところの資本家的社會に於ける勞賃現象の本質の闡明、隨つて勞賃の決定は、スミスに在りては、如何に取扱はれてゐるであらうか？　スミスは現代社會に於ける

勞賃論として一方に生存費說をとると共に他に需要供給說（又は勞賃基金說）をとつたものであつて、彼はこの二つの勞賃論を相混淆提言したものであるとは通常一般に云はるゝ所である。果して彼はこの二つの勞賃論を並び提言したか、又この二者を如何なる意義に於て支持主張し、如何なる程度に於て兩者を關係づけたか、そして結局に於て勞賃の本質、決定を如何によく闡明ならしめたか？　私は次にこれらの問題について若干詳しく吟味して見たいと思ふ。先づ初めにスミスの近代社會に於ける勞賃論の結構內容を吟味し、然る後これを批評する。

## 三

スミスに從へば、商品の價格に自然價格があるやうに、如何なる社會に於ても、勞賃の、通常の、平均の、自然の、率（an ordinary, common, average, or natural rate of wages）なるものがある。さうしてその理由とする所は、商品の價格は勞賃、利潤、及び地代から成り立つてゐるのであるが、その價格が、需要供給相一致し、その自然價格にて賣却されたる場合に於ては、それはその構成要素たる勞賃、利潤、地代がその各々の自然率にて支拂はれたることを意味すると云ふにある。卽ち一言にして云へば、スミスに在りては、商品の自然價格の成立は勞賃の（そして又地代の、利潤の）自然率なくして見るを得ないのである。

然らば次にこの勞賃の普通率とは何であるかといふに、スミスに依れば、それは雇主と勞働者の兩當事者の契約によりて定まるものであるが、この兩者の利害は相衝突する。卽ち勞働者はなるだけ多く得んことを望み、雇主はなるだけ少く與へんとする。前者は勞賃を騰貴せしめんがた

めに、後者はこれを下落せしめんがために、各自團結しようとする。而してこの兩當事者のうち孰れが通常の場合にこの爭議に優位を占め、以て他方を自己の提出する條件に服從せしめ得るかを見ることは困難ではない、としてスミスは雇主側の優位を詳に說明する。卽ち彼に從へば、雇主の方は人數が尠いから容易に團結し得らるゝのみならず、法は雇主の團結を正當として容認する、若くは尠くともそれを禁止しないに反し、勞働者の人數は多く、且つ法は勞働者の團結を禁止する。更に一般に地主、農業者、工業家、商人等はたとひ一人の勞働者を使用せずとも猶ほ且つ旣得の資本によつて一兩年は生活して行けるが、勞働者はさう云ふわけには行かぬ。何處かに雇はれ口を見出さなければその日の生活を支持して行くことができないのである。

斯樣に一般的に見て雇主は常に優位に、勞働者は劣位に在るものであるから、若し特異の事情なき限り、卽ち勞働者に對する需要高まり、雇主は相競うて勞働者を傭ひ入れんとするがやうな社會の進步的なる狀態でなき限り、換言すれば社會の靜止的なる狀態の下に於ては、勞賃の自然率は最低生活費——普通の人道に叶つてゐるところの最低生活費——に落つき、勞働者の境遇は洵に窮迫たらざるを得ないのである。卽ちスミスの主張する所を他の言葉を以て要約すれば、土地占有せられ、資本蓄積せらるゝに至れば、雇傭者は生產手段を獨占私有し、勞働者はたゞその勞働を賣却することにより辛うじてその日の生活を支持して行くにすぎないがゆゑに、一般的にかゝる社會に於ては、勞賃はその最低生活費用を標準として決定せらるゝものであると云ふに在る。かくてスミスは云ふ、『人は常に自分の仕事にて生活して行かねばならない。そしてそ

の勞賃は少くとも自分の生活を支持するに足るものでなくてはならない。否その勞賃は大低の場合に於て若干それ以上でさえなくてはならない。さうでなかつたならば彼は一家を養育することができないであらうし、そしてかゝる勞働者の種族は一代以上續くことはできないであらう[1]』、と。

スミスはこの點に關してかのカンチョーンの主張を述べてゐるが、それに依れば、最低種類の普通勞働者でも彼等がよく二人の子供を養育し得るがためには、尠くとも彼等自身の生活資料の二倍を贏ち得ねばならぬ。といふのは出生兒數の約半數は成年に達する迄に死んでしまうのが普通であるから、二人を成年に迄育て上げようとするとどうしても四人の子女を養育しなければならない、さうしてこの四人の小供の生活費は丁度ほゞ成人一人のそれに相等しいからである（この場合妻の勞働は子供の養育に必要であるから、たゞ自分の生活資料をかせぐに足るにすぎない）。それゆゑに一家族を維持するがためには、最低種類の普通勞働ですら、夫婦二人の勞働を合して、彼等の生活維持に必要なるところのものよりも幾分多く儲け得なくてはならないことは確であるが、しかしそが果して如何なる割合であるか、卽ち右の割合であるか、或は他の割合であるかを決定しようとはしない、とスミスは云ふのである。

しからば次に資本家的社會に於ては、勞賃は一般的に何故に勞働者の家族の最低生活資料に落ちつくか、その機構如何？　スミスはこれに答へるにかの自然的人口法則を以てする。卽ち彼に從へば、『凡ゆる種類の動物はその生存資料の多寡に比例して自然に增殖するものであつて、如

1) Smith, ibid., pp. 69-70.

何なる種類の動物も到底それを越えて増殖することはできぬ。しかるに文明社會に於ては、生存資料の窮乏が人類の増殖を制限するのは、たゞ國民の下層階級の間のみである』[1]。その理由とする所に依れば、貧困は無論結婚を奬勵はしないけれども、必らずしも妨げない、否貧困は出生上都合のよいやうにさへ見える。例へば半ば餓死の狀態にあるスコットランドの北部地方の一婦人で二十人以上の子供を生むものが往々ある。しかるに美食に飽いてゐる貴婦人で一人の小供すら擧げることができないものが屢々あり、そして出來でも高々二三兒で盡きてしまふ。けれども貧困は小女の養育上甚だよくないので、たとひ貧困なる階級に多くの子供が生まれても、結局生き殘るものは富裕階級のそれに比し一段と少いものである。スコットランドの一婦人が二十人の子供を生んでも、大低は死んでしまつてたゞ僅かに二人しか生き殘らないことがある、とスミスは云つてゐる。

人口の増減はかくの如き理由により食物の多寡、結局貧富の差異に歸するものであるから、若し勞働に對する需要増加の結果、勞賃が騰貴するに至れば、勞働者はよくその子女を養ひ、隨つて今迄より一層多くの子女を生育し得るから、そは自然右の制限の範圍を擴大する傾がある。さうしてこの豐かな勞賃は、勞働に對する需要が要する割合に、その制限を擴張するものである。若しこの需要が引續き増大しつゝあるに於ては、勞賃も引續き昂騰し續くのであるから、勞働者の結婚と増殖は引續き増大され、以てその増加しつゝある勞働需要に應ずることができるであらう。であるから『若し勞働の報酬が何時かこの目的のために要する所よりも尠いやうなことがあ

1) Smith, ibid., p. 81. なほ p. 147 參照。

れば、勞働者の不足を來し、やがてその報酬をこの必要率まで上げるであらう。又若し勞働の報酬が何時かそれより多いやうなことがあれば、勞働者の過剩を來し、やがてその報酬をその必要率まで下げるであらう。この前者の場合には、市場は程なく勞賃を其社會の事情が必要とする適當率まで戻すほど勞働の不足を來してをり、後者の場合にはそれ程勞働の過剩を來してをるであらう。他の凡ゆる貨物に對す需要と同じやうに、人間に對する需要が人の生産を必然的に左右し、人間の生活が餘りに遲々たる時はこれを早め、餘りに早き時はこれを止めるのは、實は斯くの如くしてゞある』[1]。

斯樣なる機構が存するから、スミスに從へば、勞働の需要がその供給よりも異常に大であつて、後者が前者に追ひつくことができない場合でない限り、或はその反對に需要が供給よりも異常に少く、前者と後者との開きが大である場合でなき限り、勞賃は、その大小に應ずる勞働人口の增減により、卽ち所謂人口法則の存在により、結局この自然率――最低生活費――に歸着せざれば止まないのである。

このスミスの自然的勞賃論はフィジオクラートの勞賃論を繼承せるものであり、後に出たところのかのリカアドの勞賃論は、その大體の結構に於て、このスミスの勞賃論を承けつぎ、それを一段と成形せるものである。

右述べたるところはスミスが資本家的社會に於てとるところの勞賃論の基本的部分の大要である。今これを要約せんに、勞賃はそれに對する社會の需要――勞賃の支拂に充てられる基金――

1) Smith, ibid., p. 82.

とそが供給――勞働人口――との增減如何により、種々なる場合に應じていろ〳〵と變動するものであるが、人口は生活資料の限度迄增加するところの傾向あるがゆゑに、それはいつかはその生理的最低限の生活資料の價格に歸着せざれば止まないのである。だからスミスの勞賃論は、一般的に見て、その骨子に於ては、勞賃の生存費說であると云つて不可はない。

しかるにスミスは社會を三つに分ける。常に繁盛富裕に赴きつゝある動的進步的なる社會、國富の增進が停止的なる不動の社會、および衰頽沈靜せる退步的なる社會は卽ちこれである。さうして彼はこの三樣の社會に見らるゝそれ〴〵の勞賃現象、隨つて又それ〴〵の勞賃說を說明する。しかもその各々の社會に於ける勞賃の說明はかなり複雜であつて、常に彼れの基本的なる勞賃論――生存費說に立脚してゐるとは云はれ得ないので、吾々は彼れの勞賃說の本體が結局に於て那邊にあるかを訝る位である。私は左にこのスミスの各社會に於ける勞賃の說明、卽ち彼れの勞賃の動的說明とも云はるべきものを吟味し、彼はそれを如何にその生存費說と相關聯せしめて說明し得たかを詮索して見たいと思ふ。

(一)進步的社會に於ける勞賃現象――スミスに在りては、その富が不斷に增進して止まない社會があり、そしてかゝる社會に於ては、勞賃はその最低額――生理的最低生活資料以上に引き續き超過することが可能なのである。卽ちスミスの詞によれば、『勞働者に往々或る利益を與へ、以てよく彼等の勞賃をしてこの率――普通の人道に叶へる最低率――以上に著しく高め得る或る事情がある』[1]のであつて、こゝにスミスの一種の勞賃基金說が展開される。

1) Smith, ibid., p. 70.

抑もスミスに於ては、社會に勞賃の支拂に充てられる基金（funds which are destined for the payment of wages）なるものがあつて、それは二つの種類――その一つは雇主の生活維持に必要なるものを超過する餘剩これである、その二つはその雇主の業に必要なるところのものを超過する資本これである――より成る。この基金が生じ、又は增加するに至れば、例へば地主、年金受領者、又は金持ちが自分の生活資料を超える何等かの剩餘を有つてゐる時又はそれを增加せる時には、彼は僕婢の一人又は多數を傭ひ入るゝに至るべく、又獨立の手工業者、例へば織物職、又は靴屋の如きが自分の仕事に必要なる原料を購入するに至り、さうしてその製作品を賣捌く迄自分の生活を維持するに足る以上の資本を獲得し、又はそれを增加せる場合には、その餘剩を以て職人の一人又は數人を傭ひ入るゝに至るであらう。そしてこの基金が增加したる結果、勞賃が生活資料の最低額を超過するに至るといふは、卽ちその基金の增加が社會の進步、國富の增進の速やになるがため、勞働に對する供給の增加を超過することを意味するものであつて、それがためかゝる場合には、年々勞働人口が、需要の增大に促進せられ、益々增加するも猶ほ且つ毎年前年よりはより多くの職業が存在するものである。ゆゑにかゝる場合には、勞働者側に於て結社團結して、その勞賃の昂騰を計り、下落を妨ぐ必要はなく、寧ろ反對に雇主の側に於て、各自勞働者を手に入れんとして互に競爭をなし、ために雇主の團結を破り、結局勞賃は漸次躍り上げらるゝに至るものである。『されば勞賃で生活してゐるものに對する需要は、凡ゆる國の所得および資本の增加に伴うて必然的に增加するものであつて、それなくして到底增加するを得ない。この所

得と資本との增加は國富の增加である。それゆゑに勞賃で生活してゐるものに對する需要は國富の增加に伴うて自然に增加するものであつて、それなくしては到底增加するを得ない』[1]。尤もスミスに從へば、高い勞賃を齎らすものは國富の現實の大きさではなくして、國富の間斷なき增加である。だから勞賃の最も高い所は最も富んでゐる國ではなく、最も繁榮しつゝある國、卽ち最も速に富裕となりつゝある國である。英國と北米との例はよくこのことを證明してゐるとしてスミスは仔細に說明してゐる。

(二)停止的社會に於ける勞賃現象——右は國富が不斷に增進して止まない社會に於けるスミスの勞賃論についてゞあるが、彼に依れば、社會には久しく不動靜止の狀態に在る社會があるものであつて、かゝる社會に於ては、たとひその社會の富は大であるにしても、到底高き勞賃を期待することはできぬ。何故なれば、勞賃の支拂に充てられる基金は如何に大であるにしても、その基金が數世紀間同一又はほゞ同一の大いさを保つてゐるならば、每年使用される勞働者數は容易に翌年要する勞働者數に應じ得べく、否應じてなほ餘りさへあるであらうからである。かゝる場合には勞働者の拂底はないであらうから、雇主が競爭して勞賃を競り上げる必要もない。あべこべに勞働者の就職口は乏しいから相互に競爭して就職者を獲得せんと努めるであらう。であるから『若しもかゝる國に於て、勞賃が勞働者自らを維持し、且つその家族を養育せしむるに十分なるよりはより多くあるならば、勞働者間の競爭と雇主の利害とからして、勞賃はやがて減少して、普通の人道に叶ふかの最低率に迄下落せざれば止まぬであらう』[2]。

1) Smith, ibid., p. 71.
2) Smith, ibid., p. 73.

スミスはこの社會の狀態に當る國として支那を擧げ、世界に於ける最も豐饒にして最もよく耕作され、最も勤勉なる國であるに拘はらず、久しく靜止的狀態に在るがために、その勞賃の安く、殆んど生理的最低生活費に歸着するの事實を詳しく例示してゐる。スミスの所謂生存費說はこの場合に最もよくその適用を見る。

(三)退步的社會に於ける勞賃現象――支那の如き國は、スミスに依れば、その發達が進步的ではなく停止的であるにしても、退步的ではない。ところが勞賃基金なるものが著しく減退しつゝある國は事情自ら異ならざるを得ない。斯樣な國に在りては、凡ゆる種類の勞働者に對する需要は減退して行く。多くの高級勞働者は自分本來の業務に職を求めることができないから、最下級の職業に仕事を求めるに甘んずる。それがため最下級の職業は自分の勞働者と上級の職業から溢れ出たこの勞働者とで一ぱいになり、その結果勞働者間の競爭は甚だしくなり、勞賃は下落し、ために勞働者の境遇は最も窮迫なるものとなるであらう。しかし多數の勞働者はかゝる苛酷の條件に於てさへなほ且つ職業にありつけずに、或は餓死するか、或は乞食をするか、又恐らくは極惡非道の大罪を犯すかして、その生計の資を求めることになるであらう。かくて『窮乏、飢饉、および死亡は直ちにかゝる階級內に蔓り、そしてこは更に他の凡ての上層階級に及び、遂にその國の住民數は、その國に殘存し、そしてその以外を破壞してしまつた專制政治又は災難から免れた資本と所得とで容易に維持されるところ迄減じて行くであらう』、とスミスは云ふ。さうして彼はこの例證をベンゲール、および東印度に於ける英領植民地の或るものに求めてゐる。

新様に、スミスに從へば、現實の勞賃率は社會の狀態如何に應じていろ〳〵と異なるものであつて、要する所、『勞働の報酬が厚いのは國富增進の必然的結果であると共に、又その自然的徵候でもある。他方に於て、勞働貧民の維持が乏しいのは、その國の事物が停止してゐることの自然的徵候であり、又彼等が餓死の狀態に在るのは、その國の事物が速に退歩しつゝあることの自然的徵候である』[1]。

スミスはその勞賃論を縷々述べたる後、それを要約して左の如く云つてゐる。

『勞働の價格の變動は單り常に食料品の價格の變動と一致せないばかりでなく、また屢々全くそれと相反することさへある。けれども吾々は、だからと言つて、食料品の價格は勞働の價格に何等の影響を及ぼさないといふことを想像してはならない。勞働の貨幣價格は必らず二つの事情によつて左右される。勞働に對する需要はその一つであり、生活上の必要品および便利品の價格はその二つである。勞働の需要は、それが偶々增加しつゝあると、停止的であると、又は減退しつゝあるとに從ひ、卽ちその需要が增加せる、停止せる、又は減退せる、人口を必要とするに從うて、勞働者に與へらるべき生活の必要品および便利品の分量を決定する。そして勞働の貨幣價格はこの分量を購買するに要するところのものに依つて決定せられる。であるから勞働の貨幣價格は食料品の價格の低い場合に時として高いことがあるにしても、需要が引續き同一であるには、若し食料品の價格が高いならば、尙更高いであらう』[2]。

1) Smith, ibid., p. 75.
2) Smith, ibid., p. 87. なほ Smith は『勞賃に對する課稅』を論ずる章に於てもほゞ同樣のことを言つてゐる。ibid., II, p. 348.

## 四

以上スミスの勞賃論の大要を紹介したのであるが、彼れの勞賃論は、その內容が示す通り、かなり複雜であるから、その本體が奈邊に在るかは吾々の容易に想像し得ざるところである。私は右に於て、その一見錯雜混亂を極めてゐるが如く見える彼れの勞賃論になるだけ外見的なる統一、秩序を與へることにより、その本質如何を吟味したのであるが、しかもなほその本體如何は依然として十分に瞭にせられたと云ふを得ない。私は次にスミスの勞賃論の內容如何に關し若干の解剖批判を試みることにより、その長所を見ると同時にその缺陷を指摘して見たいと思ふ。

(一)右に於て見たるが如く、スミスの勞賃論には一方に於て生存費說があると同時に、他方に於て一種の勞銀基金說とも云ふべきものがあるが、その孰れが彼れの勞賃論の本體を成してゐるか、或は又彼れの勞賃論はこの二つの勞賃說の不統一なる混成であるか否か？　この問題はスミスの勞賃論に於ける最も重要なる問題であつて、學者のそれについて屢々論議したるところのものである。卒直に言つてスミスはこの二者を十分に關係づけてゐない。卽ち彼は勞賃基金說（需要供給說）が彼れの勞賃論の主要なる中心を成してゐるのであつて、生存費說はたゞその一部分を成してゐる、若くはそれに包括されてゐる、に過ぎないと云ふのでもなければ、又彼は生產存費を主として支持したのであつて、基金說はたゞ勞賃變動の說明としてとつたものに外ならないと明らかに云ふのでもない。彼に於てはこの二つの勞賃說は殆んど同格に主張せられてゐるが如く見える。彼れの詞にも『勞働の賃幣價格は二つの事情によつて必然的に左右される。勞働の需

要はその一、生活上の必要品および便利品はその二」、と云ふのがある。

斯様にスミスの勞賃論には一見曖昧混亂、吾々をしてその眞意が奈邊に在るかを疑はしむるところがあるとは云へ、私の見る所に依れば、この彼れの態度は、半面、變動的にして複雜極りなき勞賃現象をば、包括的に可成りよく說き得たことを意味してゐる。社會の發達、變動に應じて變化して止まない複雜なる勞賃現象はスミスの說くが如き複雜なる勞賃の說明を要求して止まない。たゞ彼はこの包括的にして複雜なる勞賃現象を統一的秩序的に何等かの基本的なる原理に立脚して克く說明し得なかつたのであつて、延いてこのことは彼が基本的なる勞賃の原理をその根底に於て支持してゐたに拘はらず、やゝもすればそれと可變的なる勞賃の現象形態の說明とを同列にならべ、或は遂にその現象形態の說明にのみ終始し、勞働の需要のみが勞賃決定の決定的なる要素であるかの如く思考するに至つたものである。卽ちスミスはこゝに於ても多分にかの粗雜なる經驗主義者として現はれてゐる。吾々は右の二つの勞賃論を要求するが如き斯くの如き複雜なる勞賃現象をば、一面それを本質的に全面的に規定するところの勞賃決定の基本的原則——勞働力再生產費說に立脚することにより、その本質、從つて資本家的社會に固有に有つところのその歷史性社會性を闡明ならしむると共に、他面それが原則に本づきつゝ、資本家的生產方法の發達階段の如何に應じてそれに特有なる理由により變動するところの勞賃の現象形態をよく說明せねばならぬ。スミスに在りては不十分乍らすでに勞賃現象說明の素材は、大體に於て、與へられてゐる。これを右の觀點の下に精練加工することにより、一つの學問的なる勞賃論を樹てることは

なほ一段の經濟事實の發達、隨つて又經濟學の發展を必要としたものである。

（二）スミスが彼れの費消勞働價値說を支持する限り、勞働は與へられたる價値部分の半面であるから、若し一方が增加すれば他方が減少するといふ關係にあらねばならぬ。だから勞賃は他の一半、利潤との對立的關係に於て常に觀察せられねばならぬ。しかるに彼はその基本的なる價値論を支持せず、一種の生產費說に移り行つたがゆゑに、勞賃の本質をこの關係に於て十分瞭にしてゐない。彼が剩餘價値說を十分展開し得なかつた理由を成す。

（三）スミスに在りては勞賃は勞働力の價値、再生產費說であるとせられてゐない。惟ふに勞働者が企業家に賣るところのものは彼れ自身の勞働力であつて、それを生產行程に於て使用することにより發動するところの勞働そのものではない。勞働力は一つの商品——而も特種なる商品——であつて、それ自身商品と同じやうに價値を有つてゐるが、勞働そのものは價値の實體であり內在的尺度にすぎずしてそれ自身としては何等の價値をも有つてゐない。スミスはこの勞働力と勞働との關係、隨つて又勞働力の價値決定を十分に說明し得なかつた。このことは彼れの學說を救ふべからざる混亂と矛盾とに陷らしめたるものであつて、彼がその本來の形に於ける勞働價値說をのみ一貫支持し得ず、剩餘價値說を發展し得ず、延いて資本家的社會の機構を十分に解剖し得なかつた理由を成してゐる。

（四）スミスに從へば、生存費說としての勞賃の決定は、普通の人道に悖らない生活資料の最低額に依存するとせられる。こゝに普通の人道に叶へる生活資料の最低額といふは、恐らくどうかこ

うか勞働者として其日の生活を支持して行けるに足る生理的最低生活資料のことであらうと思はれる（普通の人道に悖らない云々――は彼が如何に當時の支配的意識の裡に在つたかを物語つてゐる）。だからスミスのこゝに意義せるは、大體に於て、フィジオクラートの勞働の自然價格に意義せるとほゞ同樣なるべく、後世の學者が勞働（力）の價値に意義せるところの文化的道德的要素を包含してゐないと解すべきである。スミス生存費說の一欠陷を成す。こは恐らく彼が生存費說にのみ固執することなくして、一種の勞賃基金說をもとり、前者はたゞ勞賃決定の半面の理由――その最低額を成すにすぎないと看做したことに由るのであらう。

（五）スミスが生存費說に因る勞賃決定の機構を、『總ゆる種類の動物はそは生存手段の多寡に比例して自然に增殖するものであつて、如何なる種類と雖も到底これを超えて增殖するを得ない』――卽ち所謂人口法則――により說明せることは、古典學派經濟學の所謂人口法則を勞賃變動の機構として可成り成形せる態樣に於て說明したことを示す。マルサスの人口法則、それに本づくリカアドの勞賃變動の機構の說明は、その本質に於て、さしてスミスのそれより出てゐるとは云はれ得ない。だがかくの如き勞賃の變動に應じて增減するとなす純自然的なる人口の運動によつて果して現實の勞賃決定、その機構がよく闡明せられ得るであらうかは疑はしい。卽ち勞賃決定の如き歷史的社會的事象がたゞ何等の社會的歷史的制約を受けざるものとしての人口法則に依存して說明し得らるゝとは容易に云ふを得ない。彼等が問題とするところの人口現象、勞賃變動、勞働者貧困の諸々の事象はあく迄も或る一定の歷史的社會的事象であるから、それらの特種性を

全然抜きにせる、凡ゆる社會（否寧ろ彼等に於ては人間社會ではなく動物社會である）に普遍的に妥當する抽象的自然法則としての人口法則がこれらの現象の本質を克く說明し得ることは容易に信ずることができない。勞賃變動を左右する何等かの人口運動の法則があるとすれば、それはそがその下に生起する或る一定の歷史的經過的なる社會的生產方法に制約せられたる社會的歷史的なる人口法則でなければならない。事實上から言つても、勞賃の變動――勞働（力）に對する需要供給の變動に本づく正常勞賃の變動および確立――は、勞働人口の自然的生死に因る增減の如く長期間を劃するものではない。その勞賃の機構をよく說明することはスミス――古典派經濟學のなほ及ばざるところであつた。

（六）スミスは社會を三つの發達階段に分ち、その各々の社會にそれ〴〵に存するところの勞賃の自然率を說く。繁盛に赴きつゝある社會に於ける最低生活資料を超える勞賃率、停止的なる社會に於ける最低生活資料に一致せる自然率、および衰退的なる社會に於ける最低生活資料以下の勞賃率は卽ちこれである。彼は北米、支那、ベンゴールに於ける勞賃の狀態をそれ〴〵の場合の例證として擧げてゐるが、かく社會を三つの階段に分ち、それ〴〵に於ける勞賃率の說明を試みたことは彼れの慧眼であると云はねばならぬ。だが彼が示すところの停止的なる社會、衰退に赴きつゝある社會狀態は、決して資本家的社會に於ける或る發達階段に於ける社會狀態であるとは云へない。それは前資本家的社會である。資本家的勞賃の對象としてはかゝる社會に於ける勞働の報酬を擇ぶことができない。社會の發達階段に應じていろ〳〵と變動する勞賃の現象は、資本家

的勞賃を問題とする限り、資本家的社會に於けるそれでなければならない。かく彼が社會狀態發達の分別を資本家的社會の發達階段に於て見なかつたこと――當時なほ資本家的生產はその初期にあつたことから寧ろ當然であるが――、その各々の社會に於ける勞賃現象の說明が餘りに外面的現象の叙述に流れ、それら各々を通貫して等しくその現象の本體を規定するところの勞賃の本源的なる法則を說くことが十分でなかつたこと――は彼れの勞賃論の缺陷を意味してゐる。一言にして云へば、勞賃の現象形態をその本質的關係に關聯せしめつゝ、そが資本家的社會の發達に應じて如何に變動するかを十分に說明することはスミスのなほ能くせざるところであつた。リカアドは――彼は一般的に社會を發達階段に於て觀察するところが尠いにも拘はらず――資本家的社會の發達に伴うて、人口法則、收穫遞減の法則の存在により、勞賃が漸次低下する必然性を述べてゐる。

以上私はスミスの勞賃論の一斑を見、更にそれに就て問題となり得べき若干の問題について簡單ながら批評を加へ、その長所と共に缺陷を見たのであるが、それによつて見れば、スミスの勞賃論は他の彼れの經濟學說と同じやうに、從來の雜多にして片々たる勞賃論を兎も角纏りたる形に於て學問的に成形したるものであつて、洵にそれは經濟學の最初の纏りたる著作の一構成要素として副はしきものである。だが之に反して彼れの學說の長所であると同時に缺陷であるところの餘りに包括的にして常識的なることは、その勞賃論の場合にも禍されて、結局に於て吾々をし

て彼れの勞賃論の本體が奈邊に在るかを了解するに苦しましむる程にそこには曖昧と混亂がある。實際スミスはこの場合に於ても『一方に於て經濟的範疇の內部的關係、卽ち市民經濟制度の隱れたる構造を研究すると同時に、他方に於てその外に競爭現象に明に現はるゝところの關係を研究する、卽ち市民生產過程に實際因はれたる人、利害關係ある人に對して全く同樣に、非科學的なる觀察者に對して現はるゝ關係を研究する。この二つの思考方法――その一つは市民社會の內的關係云はゞその生理學を究はめんとするものであり、他の一つは單に生活過程の裡に外見的に現はれるものを、そが見え現はるゝまゝに、書き誌るし、目錄にし、說述し、そして法式的にそれが概念を決定するものである――は、スミスに在りては、公平に相並んでゐるのみならず、絕わず入り亂れて相衝突してゐるのである。』

斯樣にスミスの勞賃論には曖昧と混亂とがあるにしても、彼れの勞賃論の最も本質的なるものとして、フイジオクラートから承け繼がれたところのかの生存費說が擧げらるべきことは疑はれない（尤もこの解釋に對しては多くの反對說がある）[1]。マルクスがスミスに於ては、『勞賃は勞働者の商品たる勞働力の價値であり、そして勞働力の價値は又――他の凡ての商品と同じやうに――この商品の再生產に必要なる勞働によつて決定される』、としたのは、彼がたゞその基本的なる規定を見たものであるとする限り、當に正當であるであらう。果然スミスはこの勞賃論を半面に於て支持する限りに於てのみそれを正しく展開することができるところのかの剩餘價値說を不十分乍ら呈示してゐる。この勞賃の生存費說と剩餘價値說との關係についてのスミスの所說を吟味することは別の機會に讓る。（完）

1) 例へば Degenfeld-Schonburg, Die Lohntheorie, S. 6. Schrey, M., Kritische Dogmengeschichte des ehernen Lohngesetzes, S. 23.